会　議　録

会　議　名	令和元年度第４回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事　務　局	市民部　コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開　催　日　時	令和２年１月２４日（金）１８時３０分～１９時４０分		
開　催　場　所	市立はけの森美術館　多目的講義室		
出　席　委　員	鉄矢悦朗会長 山村仁志委員 上原佐世子委員 川﨑京子委員 浜田真二委員 鈴木遵矢委員		
欠　席　委　員	なし		
事　務　局　員	薩摩学芸顧問 コミュニティ文化課文化推進係　　吉川、岡本 　同　　はけの森美術館学芸員　中村、桑野		
傍　聴　の　可　否	可		
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由		傍聴者数	１人
会　議　次　第	１　事業実施報告等 ２　運営協議会提言について ４　意見交換等 ５　その他		
会　議　結　果	別紙のとおり		
会　議　要　旨	別紙のとおり		
提　出　資　料	１ 開催した展覧会・ワークシップ等及び今後の予定 ２ 令和元年度年間スケジュール ３ 事業のアンケート ４ 運営協議会提言		

令和元年度　第４回小金井市立はけの森美術館運営協議会

令和２年１月２４日（金）

【鉄矢会長】　　皆様、こんばんは。本日は、ご多忙の中、お集まりいただき、まことにありがとうございます。

ただいまより令和元年度第４回小金井市立はけの森美術館運営協議会を開会いたします。

では、資料の確認を事務局でお願いいたします。

【中村学芸員】　　ではこちらからまず､資料１から３までの確認をさせていただきます。資料１が、開催した展覧会、ワークショップ等という形で４ページございます。あと資料２、スケジュールが１枚ついております。こちらは１１月から４月までのものです。資料３が、それぞれのイベントのアンケート結果で、７ページございます。まず、資料１から３までをご確認ください。

【事務局】　　また、資料４が今日の議題の２であります運営協議会提言についての検討用の一番上が検討用フォーマットと書いたもので、次が、前回の提言のときの評価と課題を検討するための参考資料と比較資料としてついておりまして、最後が、２８年度から今年度までの事業についてをやはり見返したほうがよろしいのではないかということで、当市の事務報告書に掲載しております平成２８年から３０年の事業と､あと､最後のほうは、今年度の運営協議会の資料をコピーしたものをくっつけておりますので、それらの資料を参考にしながら提言の検討をしていただければと思います。

以上です。

【鉄矢会長】　　資料はそれで以上でしょうか。

【事務局】　　すみません、あと、第３回の運協の議事録がありますので、こちらで以上となります。

【鉄矢会長】　　それから、連合作品展のご案内は行っているのかな。

【事務局】　　それは指導室からの情報提供となります。

【鉄矢会長】　　指導室からですね。学芸大から卒業制作展のご案内が行っています。ありがとうございます。

それでは、次第の１、事業実施報告等の開催した展覧会、ワークショップ等について、事務局から説明をお願いします。

【中村学芸員】　　こちらについては、私から報告させていただきます。

まず一番最初に開催した展覧会についてですけれども、こちらの展示の観覧につきましては、前回の運協で既に行われておりますので、割愛させていただきまして、最終的に人数等、どうなったかというところから報告させていただきます。

入館人数に関しましては、１２月１５日までの会期全部で合計３，５６７人ということになりました。当館の企画展としまして３，５６７人、３，０００人を超えたというのは、これは串田孫一展以来ということで、歴代の企画展の中では３番目に多い数字になります。この要因としましては、伊東深水という比較的認知度の高い画家であったということに加えて、もみじの季節で、もみじの観覧に来た人が非常に多かったということと、それから、実は野川公園と一緒に東京都の都報に、もみじの名所として、野川周辺として、はけの森美術館の隣の美術の森緑地が紹介されまして、それもあってかなり会期の途中から目に見えて入館者数が増えました。特に１１月の後半に関しては１日１００人、平日でも超えるような日があったりしまして、そういったこともありまして最終的には３，５６７人という数字になっています。

ギャラリートークは、１０月２６日、比較的早い時期と１２月７日に行いまして、１０月２６日の参加者が１５人、１２月７日が７人というふうになりました。７日はちょっと天候が悪くて、少しお客様の入りが悪かったんですけれども、それでも最終的に７人来てくれたということを考えると、やはり全体的に人が非常に多い展示であったというふうに見ていいかと思います。

そういったところとしては人気が出て非常に喜ばしいことではあったんですけれども、反面、ここにはちょっと載せておりませんけれども、やはり想定以上の人が来てしまったことで設備面での故障というのが幾つか発生しまして、特にトイレ関係、下水が詰まったとか、鍵が壊れたとか、そういったトラブルがちょっと会期中に発生したので、設備のメンテナンスという意味では、やはり人が多くなればなるほど壊れやすいというところは今後ちょっと気をつけていくべきところであろうというふうに思われます。

ギャラリートークの次には、天皇即位礼正殿の儀に伴う無料開館日というものが出ておりますけれども、こちらは１０月２２日が天皇即位礼正殿の儀の当日であったということで、この日に何か記念になるようなことをしてほしいということで無料開館日を設定いたしました。これが決まったのがチラシができてからだったので、チラシなどに載せるということがちょっと間に合わなかったんですけれども、最終的に５９人の来館者がありまし

た。

そのまま関連企画、ワークショップに移らせていただきますけれども、ワークショップとしましては、まず、「樹脂ねんどを使ってキーホルダーづくりにチャレンジ！」というイベント、ワークショップを行いました。これはどちらかというと、５歳以上というふうに対象がなっているように、小さいお子さんも含めて楽しく工作ができるというところに主眼を置いて設定したイベントです。

今、ちょうど席を外しておりますけれども、事務局の吉川がこういった粘土づくりなんかのちょっと覚えがあるということだったので、吉川が講師を務めまして、この部屋で、今ちょうど講師が説明をしているところを映していますけれども、樹脂粘土という、固まると非常に軽くてきれいな透明感の出る粘土を使って、好きな形をみんなでこんな感じでわいわいつくっていくというワークショップを行いまして、最終的にこんな感じで、各制作者がつくったキーホルダーがたくさんでき上がるということになりました。

１つ、ここの傘立て用に置いていってもらったんですけれども、それ以外のもの、気に入ったもので参加者が持って帰っていいよというふうにしまして、こんな感じで参加者がつくったものが今、力作で並んでおります。一部のものは傘立てについていますので、今、傘立てで、まさに活用してもらっているというところですね。

こちらのアンケート結果に関しましては資料３についているんですけれども、全体として見ますとやはり、お子さんたちからは、楽しかったというような意見があったりとか、またやってみたいというようなニュアンスの感想もありましたので、このあたり、樹脂粘土もせっかく購入したものですし、今後また要望が多ければシリーズ化などを考えてもいいのかなと、そういう企画になっております。

ちょっと順番としては前後しますけれども、そのままワークショップということで、「アニメーション制作技法で描いてみようー新年編」というところに移らせていただきます。こちらは、実はちょっと講師の都合でどうしても会期中に実施ができなくて、会期の外、１月１２日に実施したワークショップになります。ワークショップとしましては何回か既にシリーズ化しているものなんですけれども、アニメーションの背景を実際に担当しているアニメーション背景美術家の講師のもと、実際にアニメーション制作の現場で使っている道具を使って、それぞれがアニメーション背景の塗り方のコツなんかを体験していくというワークショップです。

非常にこれも人気がありまして、募集が１０月からスタートしたんですけれども、かな

り先の話なのに１０月ぐらいから申し込んでくれている人がいたりですとか、それから、ここにちらっと映っていますけれども、かなり高齢の方なんかも、ぜひ楽しみにしているからまた参加したいということで参加してくれたりしています。中にはリピーターさんもおりまして、前に１回チャレンジしたんだけれども、またもう１回やりに来たという人もいらっしゃいました。

こんな感じで、各参加者が道具をそろえて、この部屋でチャレンジをしたんですけれども、非常に熱心に皆さん、取り組んでくれておりまして、講師もかなり頑張って事前の準備をしてくれまして、こんな感じで、これは赤毛のアンをイメージして背景を描いてきてくださったんですね。こういう線画をもともとつくってきてくれて、それを実際にアニメーションの背景の塗り方で塗っていくとこんなふうにでき上がりますよということで、これをお手本として持ってきてくれました。

ちょっと今回、枚数が多くなるので、ここには映していないんですけれども、こんな感じで、全部で６ページぐらいある塗り方マニュアルもつくってくれまして、これを参加者全員にこんな感じで配って、一つ一つやっていくというものになっていまして、これが非常に好評で、熱心な人は、何枚か紙を持って帰って、家でもやってみたいということで持っていかれたりしています。

これもアンケートの結果が資料３についておりまして、全体的にやっぱりちょっと難しかった、難易度が高かったという意見もあるんですけれども、反面、すごくやりがいがあって楽しかったというような感想になっております。

その後、来館者感謝企画というのは、ここ何回かの企画展でも毎回恒例になっていますけれども、musashino はけの森カフェとの連携事業として、企画展のチケットを持っていくとスイーツが５０円引きになるという企画です。今回、これは伊東深水展にちなんで、長野のグラニースミスというリンゴのタルトを５０円引きにしてもらうというのをカフェでやってもらって、カフェのレシートを美術館に持ってくるとポストカードをプレゼントすると、ここはいつもどおりとなっております。ちょっと今、カフェの利用者を確認中なんですけれども、美術館側の利用者としては７人いました。リンゴのタルト自体はかなり好評だったということで、一時供給が追いつかなくなるぐらいに頼んでいる人がいたということです。これが企画展に関連しての関連事業になります。

その次に、関連した企画としては、会期中に行われていたんですけれども、文化財講演会としまして「はけの住環境－中村研一邸と佐藤秀三－」というトークイベントが行われ

ております。これがちょっと順番が先ほど前後したところ、アンケートの資料３の真ん中のところに入っているイベントになるんですけれども、「伊東深水の光景」展の会期中に行われた文化財ウイークの事業として、旧中村研一邸の建築的特徴と、設計者である建築家佐藤秀三についての講演会を開催しています。これは、小金井市教育委員会生涯学習課とはけの森美術館の共催という形で行いました。文化財ウイークの一環として行われたイベントでしたので、こういった形になっています。

もともとは、こちらのイベントに関しては講師を東京理科大学の伊藤教授にお願いしていたんですけれども、告知を行ってから急遽、伊藤先生が体調を崩されてしまいまして講師が務められなくなったということで、当日の講師は急遽、濱先生と栢木先生に変更になりました。ただ、非常にイベントとしては好評だったそうで、先着４０名の枠が全部埋まっていて、当日、ちょっと体調不良なんかで来られなかった人もいたんですけれども、最終的に３４人が参加するという形になっています。こちらのアンケート結果は、先ほども申し上げましたように資料３の真ん中のところに入っております。

関連企画、イベントとしては以上になります。

その後、そのまま続けて教育普及事業について説明させていただきますけれども、こちらは１０月の前回の運協以降行われた鑑賞教室と鑑賞教室事前授業、それから職場体験学習の一覧になっています。やはり秋の季節でしたので、結構な数の小学校が来ています。

事前授業が行われたのが３校なんですけれども、事前授業のときは、こういった形でワークシートを作成しまして、このワークシートを学校に持っていって、子供にやってもらうという形をとりました。２時間でやったクラスと１時間でやったクラスというのがあるんですけれども、このあたり、今、映しているのは１時間でやったクラス用のものになっています。伊東深水の作品を見るということで、伊東深水の作品を少し説明しているところと、それから、伊東深水の作品を使って、ちょっとスケッチを自分で体験してみるというところの欄をつくっています。

職場体験学習に関しましては、これは中学校で、職場で実際にどんな仕事をしているかというのを体験してもらうというやつですけれども、こんな感じでワークシートをつくりまして、展示解説をするときにどういうようなことを説明していけばいいだろうかということを考えていくようなワークシートを実際にやってもらったりですとか、それから、写真としては撮っていないんですけれども、伊東深水展の会場に実際に入ってもらって、監視の仕事を体験してもらったりとか、そういうことをしております。

ということで、開催した事業に関しましては以上となります。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

何か質問、ご意見等ありましたらお願いします。

【山村委員】　　質問です。最後の講演会は４０人定員で満杯だったけど、参加人数は３４人ということで、わかりました。その前のワークショップ、粘土とアニメーションは、それぞれ定員は何人だったんですか。

【中村学芸員】　　それぞれ、こちらのほうは２０人ということで募集をかけていたんですけれども、ただ、ワークショップに関しましては、実際のところ、２０人で募集をかけているんだけれども、講師からも、２０人になってしまうとフォローがかなり難しいということで、できれば１５人に抑えてほしい、１５人程度であれば２人の講師で十分見られるであろうということで聞いていて、少しそのあたり調節をしてほしいというような依頼が入っていました。

ワークショップの樹脂粘土のほうも、２０人で実際に募集をかけたんですけれども、ただ、先ほども映しましたように、実際、講師が、こちらは吉川一人という形でやっていましたので、きめ細やかに講師としていろいろなところをフォローするというふうに考えると、最大数としては２０人だけれども、ただ、やっぱり１０人程度がいいんじゃないかというような形で、中では少し告知の仕方を考えていこうということで、大体、そういった意味では最初に想定していたぐらいの数になったという印象です。

【山村委員】　　であれば、今後の定員の枠もちょっと見直しして、それぞれ１５人程度にした方が良さそうですね。

【中村学芸員】　　そうですね。

【山村委員】　　そういうふうにしていただいて、ぜひ、紙粘土のほうも人気がありそうだし、講師がすばらしいようで、シリーズ化していただきたいです。

【中村学芸員】　　実際、やはりこの写真を見ても感じられるんですけれども、１０人程度で会場を使って結構ちょうどいいぐらいの印象でしたので、実際、ほんとうに２０人来てしまうと、作業するスペースという意味ではかなり無理が出たかなという印象です。これは今後、もしこの企画をまたシリーズ化していくんだとすれば、少し最初から想定として厳しい数字にはしないというふうにしたほうがいいかもしれないなと思いました。

【川﨑委員】　　私も、これ、出席させていただいて、作業台の中に、子供が小っちゃいとやっぱりばーっと広げてどうしても作業をしたがって、散らかってしまうので、１５人

がマックスかなという感じですかね。

【山村委員】　　これ、お手伝いしてくれている人はいないんですか。

【事務局】　　お手伝いはいないです。でも、お母さんが、川﨑委員もそうですが、お母さんはみんな見えていたので、皆さん、自分の世界で作品をつくられるので、そんなにこれはパニックにはならないという感じですかね。逆に、説明しちゃうと講師はあまりやることがなくて、色のまぜ方とか、これ、どういうふうに金具をつけたらいいかなとかという相談には乗るんですけれども、やっぱり一番最初、何をつくろうと考えているときは講師は暇ですので、大丈夫かなという感じではありました。やっぱりこのくらいの人数だとゆったりして見られます。

【山村委員】　　東京都美術館でもワークショップはたくさんやっているんですけれども、お手伝いしてくれる人がすごく多く、また、多くしてやっているんですね、わざと。というのは、決まったものをつくっているのではなくて、ちょっと難しいんだけれども、その子のオリジナリティーみたいなものを引き出すようなことを、横について話しながら、あまり押しつけるのではなくて、という形で対話しながらやっていくということを考えると、横に伴走していくボランティアの人とかが沢山いたほうが望ましいと思うんですけれども。

【事務局】　　これは粘土でしたので、ほんとうに皆さん、子供たちは発想豊かで、あっ、こんなものを作るんだみたいな、一応見本は飾ってあったんですけれども、全然全然、ああ、こんなのできちゃうんだみたいなものが多かったです。

【山村委員】　　なるほど。

【事務局】　　今ある外の傘立てにくっついていますけれども、壊れちゃったらどうしようかなみたいな形のものも多少あるんですけれども、やっぱり粘土って、わりあい発想豊かなものができるんだなというのが、これを見ていて感じました。

【山村委員】　　わかりました。

【鉄矢会長】　　講師と受講者数の関係を聞いていると、どうですか、指導室長。それ、学校教育はやっぱり多いな。

【浜田委員】　　今の話を聞くと、やっぱり１対１ぐらいで、ほんとうは話をしながらというのが効果的なんだろうけど、実際問題ですよね、それだけ呼んでくるかどうかですから。

【川﨑委員】　　お手伝いだったらいつでも伺いますので、ボランティアで。

【浜田委員】　　ありがとうございます。そういう方は、もしかしたら市内にいっぱいい

らっしゃるかもしれないですね。

【川﨑委員】　いると思います。子供好きでお世話が好きな人とか、やっぱり以前、教職をやっていて、子供が好きだけど、今、休職して何もしていないお母さんとか、いっぱいいると思うので、何かワークショップの募集の欄に、同時にお手伝いできるボランティアも募集と書いたら、申し込みとかお問い合わせが来るかもしれないですね。

【鉄矢会長】　ぜひ学校にもそういう方が欲しいですよね。

【浜田委員】　そうですね。

【山村委員】　なかなか、いきなり来られても子供の扱い方がわからなかったりとか、講師と技法のこととかで意思疎通ができなかったりするので、できれば恒常的に手伝ってくれるようなメンバーが個々に育っていくのが一番いいと思うんですけどね。

【鉄矢会長】　そのほかにご意見、ご質問等ございますでしょうか。

【川﨑委員】　何かカフェのほうがすごい行列が連日できていて。

【事務局】　いやいや、行ってないと思います。あれは実は、東京都の広報東京の取材が１０月かな、９月かな、来て、載せたいんですと、ああ、そうですかと。あそこのはけの道をずっと歩いていく、ほんとうに小さいコラムなんですけれども、はけの道を歩くという、「とうきょう日和」というコラムが広報東京の一番裏の面に出たんですね。それからすごくて、その切り抜きを持った方たちが、握り締めて、美術館にも来るんですけれども、カフェのほうの写真が載っていたので、あと、上に、すごい一番きれいなころのもみじの写真が、野川公園の。かなりカフェは疲弊しておりました。お客さんが来過ぎて、ぐったりしてしまうという感じで。

うちもほんとうに美術館の案内というよりか、ずっと観光案内で、もみじは紅葉していますかというのが美術館にかかってくるんですけれども、でも、うちは別に山じゃないので、東京都内どこもまだ、もみじは緑でしょうと思いながら、もみじはまだですよというようなお話とか、あとは、ここに来てから殿ヶ谷戸公園に行きたいとか、ここに来てから府中市美術館に行きたいとか、いやいや、歩いて行けないからと。行けるけど、とても歩いて行けるようなご年齢の方ではないような方が、結構そういうお話が多かったですね。

何かすごく、それはほんとうに東京都に広報していただいて大変ありがたかったんですけれども、まあ、すごかったですね。

【中村学芸員】　そうですね。そういった意味ではキャパシティーを超えた人が来てしまったというところで、カフェのほうでも、やっぱり当初想定していた人数よりもお客様

が来てしまったので、拒否はできないけれども、皆さんに待ってもらうしかないということになってしまったようですし、やっぱり美術館、カフェ双方とも、人が来過ぎると、今度逆にこちらの体制としてさばき切れなくなるというのを今後どうしていくかという一つの課題にはなったと思います。

【鉄矢会長】　　美術館は同時に何人ぐらい入っているのが最適だとか、見えてきましたと、もうこれ以上入るとちょっとやばいなというふうに、入り口の段階で、今は混んでいますよと言ってあげられる人数ってあるのかなと思って。

【中村学芸員】　　受付がそもそも、あれは二、三人を一度に対応するような大きさの受付の切り方になっているので、そもそも一度に入れる人数としては多分そのぐらいの人数しか想定していないんだと思うんですね。展示室の中に入っている人数としては、順次入れていって、あるいは１人の人間が代表して申告してもらうとかをして、鑑賞教室に入っている人数を考えると３０人、４０人というところが入れないことはないんだけれども、入ってしまうと大変そうです。

【鉄矢会長】　　大変でしょうね。

【中村学芸員】　　もうぱんぱんになるし、鑑賞教室でも、子供たちが来ちゃうと、人によっては子供たちを避けて出ていっちゃうお客様もいらっしゃるので、３０人、４０人が、展示室の中で見るという環境を整備する上では限界の数かなというふうに思います。

【桑野学芸員】　　受付が、受け付けをする方が１人しか座れない構造になっているので、たくさんお客様が来ちゃうとどうしてもさばき切れないですね。１人ずつやっていると結局、受付の方の負担というのがちょっとキャパオーバーというか、そういう形になっちゃうというのがありましたね。

【中村学芸員】　　２００人近く入った日があったと思います。

【桑野学芸員】　　その日はちょっと休む間がほんとうになくてという感じで、合間はやっぱりお金の計算とか、細かいことをして合わせたりというのをするんですけど、そういうのが全く時間がとれなくて、ちょっと無理がある形……。

【中村学芸員】　　やっぱり受け付けをしているお客さんとしては、入館の受け付け対応だけをどうしてもしているイメージになりがちなんですけれども、目の前でポストカードなんかも売っているので、ポストカードを買いに来た人もそこにまざって、お金をみんな出しちゃうので、結局、お客さんのほうも自分が出したお金がどれなのか、わからなくなっちゃうということが。ここに１，０００円出ているんだけど、これはポストカード用の代

金として出した１，０００円なのか、入館者の人がチケットで出した１，０００円なのかが何かよくわからなくなってしまうという。

【桑野学芸員】　　割り込みをするんですね、簡単に言うと。チケットを買っている後ろからという形で出したりとか、結構いろいろなパターンがありました。

【中村学芸員】　　そうですね。そのたびに受付の前でやっぱりちょっとお声がけをして、順番で受け付けますからちょっとお待ちくださいと言って、できるだけ自分で持っているお金は自分で持っていてもらうようにしてとかというような形にするので、ちょっとそこはやっぱり無理があるなというところを感じました。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。すばらしいエピソード。うれしい悲鳴とともにどうしたらいいのかとか、そのうち今度は、クレジットカードは使えないんですかとか出てくるんですよね。

【事務局】　　それと、広報東京というのは新聞折り込みなので、年齢がある一定程度上の方がやっぱりものすごく今回は多かったですね。だから、新聞をおとりになっている年齢層というのがすごくよくわかります。あと、東京中の新聞に入っているから、すごい影響力があるんだなと思って、それもまたびっくりしましたけれども。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

　そのほか、何かご質問等ございませんでしょうか。

【鈴木委員（館長）】　　すみません、館長のほうから一言。

　今回、お見えになったお客さんが相当多かったという状況で、内部は大変だったんですけれども、今まで、ここの美術館に来るまでの道のりがよくわからないという声をいろいろなところからいただいていたんですね。看板をつくりまして、教育委員会のご協力、室長にお話をしてご協力いただきまして、金蔵院のほうからこちらに歩いてくる二中の校門のところに、結構立派な、この先、美術館というのと、あと、ＣｏＣｏバスをおりたところ、二中の東側というんですか、グラウンドがあるところに看板をつけて、ここからこう行けば行けるというので、案内を強化したというか、そういう対応も今回、展覧会から……。

【事務局】　　そうですね、この展覧会。ほんとうにすごいがっちりした看板ではなくて、印刷屋さんにつくっていただいた、一応外に出せるというようなタイプの看板なんですけれども、二中ですごい協力していただいて、今、立派なのが立っております。

【上原委員】　　それに関連するんですけれども、私、東京新聞を読んでいるんですね。

そうしましたら、小金井新聞って、東京新聞の中の小金井を特集しているのが載ったんですけれども、そうしましたら、載るという予告はあったんですよ。ですから小金井公園の中かなとかいろいろ考えていたら、主なのが「はけ」のやっぱりここのところだったんですね。そして、はけの道で、金蔵院ですか、そして、はけの森美術館、ムジナ通り、野川公園とか武蔵野公園、そこが特集でぼーんと載ったんですね。その記者の方によって選ぶところはいろいろだと思うんですけれども、これでびっくりしました。もっとほんとう、はけの森美術館のある場所、そして湧水のところを私たちはもっと評価して、アピールしてもいいんじゃないかというのを一つ思いました。

それと今回、資料を持ってくるのを、どこかわからなくなったんですけれども、春と秋に森の地図ということでスタンプラリーをやっているんですね。それはいろいろなところのたてもの園だったり、学芸大のカフェだったり、武蔵野の公園のところ、野鳥のところ、いろいろ十何カ所あるんですけれども、もっとそういうスタンプを置く場所を増やしたいという意向なんですね。

私も挑戦して、このバッジをいただいたんだけれども、すごくおもしろかったというか、武蔵野の自然を守りながら、こういうすばらしいところがあるんだよというふうに歩きながらする。絵はがきをプレゼントというのもほんとうにいいことだと思うんですけれども、このバッジだったら、つけてこうしておくと、これ、一体何なの？　と聞いてくださる方が結構お友達にもいて、私も、こういうふうに一生懸命歩いてこの辺を行ったなというのがあるので、この美術館をもっとアピールしたり、茶室のこと、それも思います。今日はそれを話したくて来ました。

【鉄矢会長】　ありがとうございます。

【上原委員】　いいですよね。

【鉄矢会長】　絵はがきは見えないけど、バッジはいいですね。

【上原委員】　そう。いつもつけておけばね。

【鉄矢会長】　ありがとうございました。

では、よろしいでしょうか。

次に、今後開催予定の展覧会・ワークショップ・教育普及事業について、事務局から説明をお願いします。

【中村学芸員】　引き続き、こちらを説明させていただきます。

現在、休館中で、次の展示の準備と、それから施設のメンテナンスを行っておりますけ

れども、次回の展覧会、例年どおり、年度をまたぐ形で所蔵展を予定しております。会期が３月２２日からということで予定しているんですけれども、タイトルとしましては、新収蔵記念≪北京官話≫ということで、これは今年度の頭に、北京官話という中村研一の戦前の代表作に当たる作品を、個人の方が実は所蔵していたということがわかりまして、その個人の方から寄贈の意向がありまして当館の所蔵作品になったんですね。中村研一を代表する作品でもあるということで、この作品を中心にしたテーマ展示ということを予定しています。

１階では、この北京官話を中心に、人物を描いた作品を中心に紹介したいと考えているんですけれども、ただ、それだけだとちょっとかた苦しくなりますので、併催としまして、２階で特集展示として「にゃー　中村さんちの猫たち」という、ややフレンドリーな感じのするタイトルを設定して、中村研一が愛した歴代の中村家の猫たちというのをテーマにした展示で、猫たちに限らず、中村研一が描いた動物たちの姿というのを作品の中から見ていくというテーマの特集展示を２階で併催する予定です。

こちらが３月２２日からということになっているんですけれども、これに関連しまして２１日、１日早いというところなんですけれども、ギャラリーコンサートを予定しています。このギャラリーコンサート、実は前回の「すなわち喫茶す」という所蔵展のときにも１日前倒しをしてギャラリーコンサートを開催して、非常に好評をいただきまして、アンケートの結果としても、ぜひまたこういった企画をやってほしいという意見も多かったので、今回も３月２１日に１日早く展示をごらんいただいて、かつ展示室でコンサートを楽しんでもらう、あわせて作品の解説を学芸員が行うという内容になっています。

また、このギャラリーコンサートが、１日早く展示が見られるというところとあわせて楽しんでいただけるイベントになっていて、それ以外に、茶室「花侵庵」、今日来ていただいたときにも入り口のところに車両が幾つかとまっていたかと思うんですけれども、今ちょうど「花侵庵」の修復を行っています。その修復が、おそらくこの展示が始まるころには一段落ついているだろうということで、修復ができた、ずっと吉川のほうにも頑張っていただいていたんですけれども、なかなか登録有形文化財になって傷みが進んでいるというところが手を当てられずにいたんですけれども、それがやっとかなったということで、それを記念して茶室に関することとしての特別トークイベントを予定しています。

茶室のトークイベントというと、今まで建築の面からいろいろお話をしてもらうというイベントを何度かしてきていたんですけれども、今回ちょっと視点を変えまして、茶室の

中でどういうようなことが行われていたのかというところに目を向けて、中村研一が愛したお茶の空間であるとか、お茶やお茶菓子、それから近代の文化人たちがどんな感じでお茶を楽しんでいたのかというようなことを、わりと幅広くいろいろ話してもらえるようなものにしようということで、これは虎屋文庫、株式会社虎屋のほうでやっているお菓子に関する文庫があるんですけれども、こちらの文庫長の丸山良さんにお願いしまして、お茶菓子をめぐる人々というような、わりと幅広いお話をしていただこうというトークイベントを予定しています。こちらは、できればということで虎屋のお菓子を提供してもらって、そのお菓子を楽しみながらお話も楽しむというイベントにしたいなということで今、設定を進めています。

最後に、ギャラリートークとしまして、会期中に、先ほど申しましたギャラリーコンサート以外にもギャラリートークを行いたいということで、この日が今のところ３月２９日と５月３日ということで予定をしています。

それから、これは毎年例年の話ですけれども、中村研一の誕生日が５月１４日であるということを記念して、この所蔵展の会期の中で、５月１４日に一番近い５月１０日を誕生日を記念した無料観覧日としたいということで、これも今、チラシなどでも告知を進めているところです。

今後開催予定の展覧会と、それに伴うワークショップ等については、以上となります。

【鉄矢会長】　ありがとうございました。

ご意見、ご質問等がございましたらよろしくお願いします。

【川﨑委員】　茶室のトークイベントは、場所を茶室でやるわけではなくて、別の場所でやるんですか。カフェとか。

【中村学芸員】　茶室がまだ、完全に中に人が入って、例えばお茶をたてたりできるような環境としてそこまでいっているかというと、ちょっとまだおそらく間に合わないだろうということと、それから、３月末というふうに考えると少し肌寒いであろう、それで暖房とかを入れるわけにもいかないので、そう考えると、ちょっと温度が管理できて、少し腰を据えてお話を聞けるような環境を整えるという意味では、先にちょっと茶室の外見を外から見て、戻ってきて、このお部屋で少しお話を集中して聞いてもらうという形を予定しています。

【山村委員】　ただの質問なんですけれども、３月から始まるのを楽しみにしているんですが、中村研一の北京官話、その展示はどんな感じになる予定ですか。

【中村学芸員】　北京官話という作品が、縦が１メートル弱ぐらいで比較的大きいので、展示室の中へ入ったら、目の前に北京官話がまず目に入るというような形で、１階の展示室は一つ目玉をつくって、その目玉を中心に少し周辺の作品として関連づけて見ていけるような形で作品を並べたいと思っていまして、今ちょっとそれを選んでいます。

有償のリーフレットまではつくれないんですけれども、今、北京官話の図版が少なくとも大きく載っていて、手に持って帰れるようなリーフレットを無料で配布する形でつくりたいと思っていまして、ただ図版というだけだと、何でこれがそんなに記念して展示するほどのものなのかというところがいまいちわかりづらいところもあるかと思いますので、ちょっと簡単な解説を載せたものにしたいなというふうに思っています。

そういった意味では、どうしても１階の展示の中では、制作背景とか、社会背景とかそういったことについて少し情報量が多くなってくる、目で見える作品を楽しむということ以外に付加する情報が多くなってきてしまうので、そういったところとのバランスをとる上でも、２階では少し、猫たちというものを見ていくことで中村研一のもっと私生活的な部分というところに着目していけるような、少しそういった１階と２階でめり張りをつける形にしたいと思っています。

【山村委員】　こちら、１９４０年の制作ですよね。二千六百年奉祝展、東京府美術館で展示された。

【中村学芸員】　はい、そうです。

【山村委員】　その時代のものを当館の所蔵品の中から選んでくるのか、それよりも人物画という系譜で選ぶのか。あれは奥さんを描いたものなんですね。

【中村学芸員】　はい、そうです。

今ちょうどこんな感じでリーフレットの中身をつくっているところなんですけれども、ただ、１９４０年に描かれた作品で、戦前の作品だけで展示室を埋め尽くすというのはちょっと所蔵のコレクションの系統的には難しいので、どちらかというと人物というものをもっと早い時代、１９２０年代後半から見ていって、一つの頂点がこの１９４０年の中村研一、北京官話というものでやってきて、それから戦後に至るまで、中村研一が人物というものをどう描いていたのか。特にその中で、戦前から戦後を通してずっと一貫して最も重要なモデルであり続けた富子夫人という妻の姿がどう描かれていったかというのを見ていくようなテーマにしたいと思っています。

なので、わりと今、選んでいる段階で富子夫人ばっかりという状態になっちゃっている

ので、少し変化をつけるかというところを考えています。

【山村委員】　　まだ検討中なのか。でも、人物像を中心にした展覧会になりそうと。

【中村学芸員】　　はい、そうですね。その中で富子夫人をどうやって散らしていくかというところを今ちょっと考えています。

【山村委員】　　わかりました。

【鉄矢会長】　　すみません、この展覧会名はまだ、これ、どこで切るのかがよくわからないんですけれども。

【事務局】　　≪北京官話≫で切れる。これ、少し表記がおかしいです。

【中村学芸員】　　すみません、これ、スペースがちょっと変なふうに入っちゃっているんですけれども、一旦、新収蔵記念≪北京官話≫で切れます。

【鉄矢会長】　　新収蔵記念≪北京官話≫、ここでスペースがあるんだね。

【山村委員】　　新収蔵記念と≪北京官話≫はもっと近い。

【鉄矢会長】　　もっと近い。≪北京官話≫、新収蔵記念のことなんだよね。

【山村委員】　　そういうことです。

【鉄矢会長】　　そうだよね。

【中村学芸員】　　併催　特集展示というところから２階での特集展示のタイトルになります。

【鉄矢会長】　　はい。

【桑野学芸員】　　チラシの上では、北京官話がやっぱりメインなので、これが８０年ぶりの公開という形で持ってきて。

【鉄矢会長】　　北京官話って、すみません、私は勉強不足だから、そんなに有名なものなんですか。タイトルにがーんとやるほど、やって、みんながおおーっと言って行くのかというのが疑問です。

【中村学芸員】　　一応、中村研一の中では、やっぱり一番大きな展示に出した作品ですし、１９４０年という意味では、中村研一にとっても画業の中では一番ばりばりやっていた時期ですし、社会的な背景としても日本がすごく微妙な時期にあったタイミングなので、そういった社会的なところからしても、中村研一の人生からしても、結構節目の年につくられた作品というふうに言っていいと思います。

【山村委員】　　北京官話って、北京語という意味なのでしょうか。

【中村学芸員】　　官話というのが、科挙の人とか官僚の人たちがしゃべる言葉というの

で、もともと南京官話という、南のほうの官僚の人たちがしゃべる言葉と、北のほうの北京のあたりの人たちがしゃべる言葉のニュアンスが違うというので、それぞれ南京官話、北京官話というふうに呼ばれていたようなんですけれども。

【山村委員】　その人物像に北京官話というタイトルがついている意味とか、背景とかってあるわけだよね。

【中村学芸員】　その辺のことに関しては、中村研一が実は１９４０年当時にコラムで解説をしていて、北京に行ったと。そのときに北京官話の独特な響きというのを耳にして、その響きが印象に残っていて、その印象というのを画面に捉えたのがこの絵なんだという、何かわかるようなわからないような。

【山村委員】　それで、チャイナドレスを着ている奥さんを描いたということ。

【中村学芸員】　はい、そうです。

【山村委員】　だから、一般の人には多分、それだけではわからないと思うんだよね。

【鉄矢会長】　いや、僕、今、聞いていて、その微妙な時期に、画業がすごいいいときのタイミングのものですと、今、中村研一美術館の中ではほんとうにすごいものをやるんだよというのが出ているとよくわかるなと思ったんですけれども、北京官話、北京官話って何か連呼されても、そうなんだっていう感じがします。

【山村委員】　多分、みんな、きょとんとすると思う。

【中村学芸員】　そうですね。なので、ちょっとリーフレットを配ろうと思っているというところです。

【鉄矢会長】　やっと入ったとか、何かそういうような意味合いのものが。

【鈴木委員（館長）】　これは行方不明のやつだったっけ。ありかがわからなくなった。

【桑野学芸員】　そうです。しばらく。

【鉄矢会長】　そうしたら、ほんとうに今、逆に、行方不明だったものが見つかったという話とか、何かそういうわくわく感でちゃんと表現した方が良さそうです。

【山村委員】　北京官話って言われても、普通の人はわからない。

【鉄矢会長】　私もそう思います。

【桑野学芸員】　確かに、何か入れたほうがいいかもしれない。

【中村学芸員】　今のところ、ちょっとそこを考えて、今、８０年ぶりの公開というところを推している状態です。

【鉄矢会長】　多分、学芸員さんは、このすごさは、日常でものすごいことって言って

いるんだけど、それがもし普通の人に言うと、大したことがないということになるかもしれません。

【山村委員】　　いや、これ、寄贈で入ること自体、ものすごいことです。すばらしいこと。

【中村学芸員】　　なので、ちょっとそのあたりは、うまくＰＲしていく方法を何か考えます。

【鉄矢会長】　　何か行方不明だったものが、やっときれいに整えられて公開できますみたいな話が。

【山村委員】　　紀元二千六百年奉祝記念展って、すごく大きな展覧会で、東京府美術館を全館使った大展覧会で、名だたる画家がそこで大作をみんな出した。皆が国のために出品した。

【鉄矢会長】　　幻の東京オリンピックのとき。

【山村委員】　　１９４０年って、違う、幻のオリンピックのときだっけ。

【中村学芸員】　　いや、違いますね。ちょうど日独伊三国協定とかを結んだ年ですね。その２年前にちょうど支那事変が始まって、日中戦争には突入しているというタイミングです。

【山村委員】　　まだ日米戦争には至っていない。

【鉄矢会長】　　それは、でも、学芸員さんにお任せします。

【山村委員】　　とにかく、一般の人に何かわかりやすいポスター、チラシをお願いします。

【桑野学芸員】　　はい。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

　では、次の運営協議会の提言について、事務局から説明をお願いいたします。

【事務局】　　資料４ですけれども、今期で提言を出していただくということは第２回からお話しさせていただいておりますが、今回、今日検討していただいて、事務局のほうである程度形をつくって、次回の最後の運営協議会の中で決定して、市長宛てで実施していくという形をとりたいと思っております。

　今、ここにたたき台をつくっているんですけれども、第３回運営協議会のときに山村委員より、別紙ではなく、提言の内容をその中に含んだほうがいいという意見があったんですけれども、提言と、その根拠の評価、課題を別紙としたほうがやっぱりわかりやすいん

じゃないかということを、この間、ご意見をいただきましたので、前回同様の形にしてみたらいかがかなということで、今回、この検討用のフォーマットはそのような形でつくっております。

比較するために斜めの斜体文字のところが前回の文章で、前文、主文、提言という形で入れていただきたいなと思っております。ただ、いきなり前文、主文、提言というのはちょっと難しいのではないかということで、前回出たのが平成２７年度ですので、２８年から現在の令和元年までの事業を見返した形で、まず、評価と課題のほうから検討しつつ、最後に提言と主文をつくっていったらどうかというようなご提案もございましたので、その辺のところを含みながらこの会議の中で検討していただければいいかなと思っております。

【鉄矢会長】　　さて、あと３０分かっちりで。

【山村委員】　　私のほうもちょっと言わせて下さい。すみません、前回、別にしてくださいと言ったものですから説明させていただきますと、ここにある提言と、評価と課題、２つあるんですね。本来、評価と課題、つまり今までこの２年間、３年間の実績の評価と課題があって、要するにそれをチェックして、その課題を解決するためにこういう提言をしますという順序なんですよ。前回は、まず提言があって、提言の中にその前提として評価と課題というのを別に付けますよというのを付けて、提言しますよという形にしてあったんですね。だから、本来は評価と課題のほうを先にやって、それから提言なんだけれども、前回と同じようなスタイルを踏んでも、そもそもの主文のところに括弧で「評価と課題参照」とあるので、おかしくはないというか、同じフォーマットをとったほうが継続性という意味からもいいんじゃないでしょうかというように私もちょっと思い直して、それでこういうふうにしていただいております。

吉川さんのほうで事業一覧もつけていただいたので、大変わかりやすくなっていて、この事業一覧をよく見て、今までの２８年度と令和元年度までの事業成果というのを評価していただいて、その中でこういうことはできなかったという課題について吟味していただいた上で提言まで持っていくという、ＰＤＣＡ的な形を踏んでいただければ、というふうに思います。

【鉄矢会長】　　そうすると、まず、褒めましょう。評価の中のまず、褒めることを、ちょっとこれでいいのかどうか、もっと褒めるところはないのか。ただ、前回もそうなんですけれども、褒めると、このままでいいじゃないかという痛しかゆしのところなので、褒

められた部分は、もしかしたら、後で削除されて学芸員さんの心の中にしまっておくものになるかもしれません。その辺は戦略的に出てくると思うんですけれども。

まず、褒めるところで、１枚開いていただいて評価と課題についてのところを見ると、茶室の有効活用。もちろんこれは非常に大きな成果だと思います。というところから行って少しフリーに事業に関する、この順序を少し行ったり来たりしても構いませんので、企画展覧会とかで気になったこととか、所蔵作品展で気になったこととか、過去の展覧会をちょっと見ながら、２８年、令和元年度から事業一覧を見ながら少し考えていただくと良いと思います。

【薩摩学芸顧問】　すみません、ちょっと確認です。皆さん、ちゃんと確認したほうがいいと思うので、何年度分から何年度分ですか。

【事務局】　平成２８年度分から令和元年度分。

【薩摩学芸顧問】　令和元年度分も入ると。その４年間ですね。

【事務局】　はい。

【薩摩学芸顧問】　じゃ、この資料についているとおりですね。だから、来年度に出すから今年度も入ると。そうですね。

【事務局】　はい。今年度は、まだ終わっていないものもあるんですけれども、委員さんの任期が今年度いっぱいですので、一応今年度までのもので出していただければ。

【山村委員】　西暦でいうと２０１６、１７、１８、１９年度ね。

【鉄矢会長】　ほとけをえがく、うつすは、非常に印象に残る展覧会でしたね。

【中村学芸員】　ありがとうございます。

【鉄矢会長】　どういう評価にするのか。いい展示だったと言っているだけじゃ、しようがないから。

【山村委員】　企画展覧会・所蔵作品展ですよね。枠組みが、１番が、事業に関すること、２番が作品の収集、調査、研究、３番が運営・広報、４番が地域連携というふうに一応枠組みをとってあるので、この事業一覧を見せていただいて、事業についてはこれでかなり評価できるし、作品の収集についてもすごく成果が上がってきているとわかるのですが、広報とか、運営とか、地域連携については、何か資料とかはあるんですか。今までの我々の経験とかで、もちろん書くのはいいんですけれども、こんなふうに何かあると、メモがあるとありがたい。

【事務局】　そうですか。

【山村委員】　　建物の壁のことだとか、あるいは庭のことだとかをやって、そういうのは運営に入ると思うんですけれども。じゃ、茶室なんかも運営に入るのかしら。

【鈴木委員（館長）】　　附属施設になりますので、運営の範疇かなと思っています。

【事務局】　　ＪＲの広告をし出したのが平成２５年度だから、西暦でいうと何年でしょうか。ＪＲの駅張り広告を始めたのが、前の共同巡回展のところからだったんですね。その後、ＪＲの駅張り広告については、市の予算がとれているんですけれども、そのほかの新聞広告では、さっき東京新聞さんのお話をしてくださいましたけれども、今一番、わりあい東京新聞さんがご協力していただいて広告を載せてもらっているんですけれども、その辺の有料広告、それから雑誌の広告等々は全て助成金を毎年とっておりまして、その中から載せて広報をしているという状況です。

【山村委員】　　これは２０１６年からずっとそうですか。

【事務局】　　そうです。２０１６から。各年度の一番最後のところ、キのところが助成金になっているんですけれども、その助成金の中で広報費を賄って今まで来ていて、なかなか市の予算の中ではＪＲの駅張り広告の予算しかとれておりませんで、ポスター、チラシ以外の広報になると、助成金があるので、広告を載せているという状況になっていますね。

あと、今年度、今ちょっとまだおくれていてできていないんですけれども、今年度予算、２０１９年度の予算で、市役所のホームページじゃなくて、はけの森美術館独自のホームページが今年度中にできることになりました。

【鉄矢会長】　　そうですか。

【事務局】　　今、作業をしている最中で、もうちょっと早くできるはずだったんですけれども、今年度中にははけの森美術館のホームページはできます。

あとは、先ほど館長が言いましたように、看板、簡易なものですけれども、看板を立てたりとかをしていまして、広報的にはそのような形ですかね。

あとは、運よく広報東京とか、雑誌の取材が来たりとか、今回、『芸術新潮』に載せてもらいまして、『芸術新潮』の特集にも載りました。

【事務局】　　東京の美術館、有名どころと一緒に載りまして、何かそういう取材も最近多いかなという気はします。やっぱり、すごくカフェの効果はあるのかなということと、文化財の中でカフェをやっているというところも、取材の対象としてはすごくいい効果を生んでいるかなという気がします。

【山村委員】　　それも登録された効果と。

【事務局】　　そうですね。登録された効果だと思います。やはりカフェも認知されてきていて、相当おいしいものを出しているので、それなりにお客さんがついてきているところが相乗効果を生んでいると。うちの美術館を見ないで、カフェばかりに行くお客さんも多いですね。美術館を見てほしいなと思うんですけれども。大概、朝１０時開館と同時に美術館に入って、そのままランチに行く方がすごく多いですね。

【鉄矢会長】　　運営面でいうと、雨の日企画って始まったのは……。

【中村学芸員】　　２０１７年から。

【鉄矢会長】　　２０１７年。

【中村学芸員】　　平成でいうと平成２９年からです。

【鉄矢会長】　　じゃ、２９年からだから、いいのか、そういうのを始めた。工夫をしているけれども、まだ効果は上がっていないみたいな。そうですね、雨の日。

【中村学芸員】　　まあ、そうですね。雨の日を少しでも盛り上げようということで。

【鉄矢会長】　　インドネシア大使って来たんですか。

【中村学芸員】　　インドネシア関係の方はちょっといらっしゃらない。

【鉄矢会長】　　声をかけなかったんですか、結局。

【中村学芸員】　　お知らせとしては出したんですけれども、ちょっとうまくいきませんでした。

【鉄矢会長】　　出したことが重要だと思いますよ。

【薩摩学芸顧問】　　よろしいですか。顧問という立場で、お伝えしますと事業に関することに関して、まず、展覧会関係に関しては、実は意識的に大きく方向転換をいたしました。それまでは、ここ、何しろ「中村研一記念」とついていまして、それから中村研一のコレクションがたくさんありますので、基本的には日本近代洋画、それから洋画でなくても、堂本印象のような中村研一と仲のよかった人、そういう枠組みでやってきたんですね。

これは、開館して、あまり無節操にいろいろなものをやるのはまずいだろうと、中村研一という者をやはり立てていくべきだろうということでやってきたんですけれども、もう１０周年を迎えるということで大きく方向転換をして、一番最初がこの企画展、開館１０周年記念、風景への視線、近代イギリス風景画展。これはたまたま、今、茅ヶ崎の美術館の常勤の学芸員になった鈴木伸子が西洋美術史でドクターまでとっている人だったので、できるということで任せたというのはあります。それから、今、委員長の言われました、

ほとけをえがく、うつす。それから今年度でしたか、模写－西洋絵画の輝きというふうにちょっと方向転換をしたということです。これを評価とするかどうかということはしまして。

それから、教育普及事業に関しましては、これは主として学校関係というふうに考えてもいいかと思いますが、軌道には乗ってきています。よく言えばシステマチックにはなってきています。悪く言えばちょっと固定化している。

それから、作品の収集、調査、研究等で、これは、収集予算がありませんので、積極的に打って出られないんですけれども、予想外の成果が、それこそ北京官話ではないですが、それから、実はつい最近も１点また出てきました。つまり、こんな小さな美術館であっても、やはり開館してから１０年ぐらい、中村研一というので特化してというか、中村研一及びその周辺ということでやってきたので、かなり知られたということで、ここに里帰りしてくる作品が増えたと。こちらから打って出ているわけじゃないんですけれども、寄贈の話がかなり来るということで、これは偶然ではなくて、中村研一のことをずっとやってきたからということで、これも評価していいだろうと思います。

それから、広報もわりあいに充実してきているんですが、ただ、広報の方法というのはどんどん変化していますので、これをどうするか、これは課題のほうだと思います。

それから、運営全般に関しては、これはまた毎年毎年、毎回毎回そうなんですけれども、美術館の小さな規模に比しても、このお金及び人の体制が脆弱であるということはいまだに変わらないかなと思っています。

それから、地域との連携は、いわゆるワークショップとかそういうものが地域連携になるだろうと思いますが、これは教育普及ほどにシステマチックにはまだなっておりません。この辺をどう考えて、どう評価して、どう課題にしていくかというような方向でまとめていけば提言になるのかなというふうに、顧問としての立場からはそのように思っているというか、考えております。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

では、続いて館長の評価。

【鈴木委員（館長）】　　前期からかかわっていたわけではなく、私、２９年から館長をやらせていただいておりますけれども、行政職の事務職員の充て職の館長というのは、やや、やっていてつらい立場ではあるんですけれども、広報という部分でやっぱり課題があるのかなと思っていて、それについては担当職員の頑張りで、助成金も申請すれば出てくると

いうものではなく、努力をしてとってきていると。それによってその中で広報の費用を賄っている部分というのはあるので、頑張ってできているところではあるんですけれども、今後も必ずそれがとれていくかというと不安定で、予算の確保については、自分の責任なのかなと思っていていろいろ努力しているところなんですけれども、なかなか、小金井市全体の財政状況の中で、文化という部分についてお金をかけるというのがやっぱり後回しになりがちな面があるのかなというのが、２９年からこの職をやっていて感じるところです。

今ちょうど山村先生も委員になっていただいておりますが、芸術文化振興計画の第２期計画の策定作業を行っておりますので、そういう中では、もうちょっと具体的な芸術文化施策に対する財政的な考え方というのを計画の中で位置づけていただければ、もうちょっと予算確保もしやすくなっていくのかなと思っております。

体制については、薩摩先生やいろいろな委員の方からもおっしゃられる、そのとおりというところもあるのですが、人員の問題も、役所の考え方と美術館はこうしたいというのがなかなかうまくすり合わせられないというのが現実ですが、課題として、ある意味一番大きなものかなというふうに思っております。それを何とか解決できる方向にうまく持っていけたらいいなというのが今、自分の考えているところです。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

指導室長。

【浜田委員】　　私は、教育普及事業のちょっとお話をさせていただくと、大変子供たちは喜んでいると思うんですね。ただ、システマチックになって、こっち、やっているほうは、先生方も毎年毎年同じようなと思うかもしれないけれども、来ている子たちは、毎年小学校４年生というのは新鮮なので、その子たちにとっては、非常に地域にこんなすばらしいところがあるのかと知ることも大事ですし、本物の絵を見るという、すばらしい絵を見るという経験もそうそうないことですから、これに興味を持たせるということで、ぜひこれはすばらしい事業なので、幾らちょっとマンネリと言っても続けていただきたいというところですね。

それから、出前授業で、もう少し余裕があって、学校も手を挙げている状況であるのであれば、さらに拡充の方向で、どんどん増えてきていますよね。ただ、行っていらっしゃるのは多分、きついところがあるのではないでしょうか。

【中村学芸員】　　会期中に平日、どちらか１人しか出てきていないので、その中で平日

に学校に出ていくとなると、なかなか出ていく日がとれないんですね、というところを含めて、やっぱり今年も出てきた要望にはできる限り対応できるようにしようと思います。

【山村委員】　　４校？

【中村学芸員】　　３校ですね。３校で、ただ、１００人ぐらいの小学校４年生に対応するというふうに考えると、結構やっぱり３校でもぎりぎりだったし、おそらく限界としては３校、４校というのが、現実的な意味で日程がとれるというところの限界であって、そこを考えると今後、できれば学校の要望には対応していきたいけれども、ちょっとどうしようかというのは実際に担当する側としては今、悩んでいるところです。

【浜田委員】　　ただ、事前授業、出前授業をやった学校とやっていないところは、やっぱりやったところのほうが子供の興味だとか、その辺は全然違うかなと。どうですか。

【中村学芸員】　　そうですね。今回、ちょっとワークシートをつくりましたけれども、こういうワークシートでテーマの作品なんかを見ると、やっぱり事前授業をやっていた学校なんかだと、あっ、これ、やったやつだということですごく興味を持ってくれますし、模写、先ほどの敦煌莫高窟壁画模写のときなんかも、先にどういうところに注目するかというところを事前授業で話せるので、来たときに、事前授業で取り扱った作品以外のところでも、出てくる言葉、連想ゲーム的に子供の中で出てくるので、そういった意味では、限られた鑑賞の中でじっくり見る時間をより深くつくっていけるという効果は確かにあると思っています。

【浜田委員】　　いつも決まった学校になっちゃうかなと、美術の先生。

【中村学芸員】　　そうなんですね。今のところ、やっぱり去年もやってよかったからまたやりたいという先生が基本的には声をかけてくるという形になってくるので、ちょっとそこを、ただ、明らかにキャパシティーの限界が見えているところでどうしようかというのはほんとうに難しい問題だと思っています。

【桑野学芸員】　　あと、その流れでいうと、学芸員が外部に出ていって教えるというのは比較的新しいと思うんですね。大きい美術館ですと教育担当の人が専門でおられて、それに時間を割けたりとか、準備に時間を割けたりということがあると思うんですけれども、どうしても、さっき言ったような形で開館時はほかの業務をしつつ、１人ずつしか平日はいられないということがあって、なかなか全部の要望に今のところ応えるのは難しいのかなという話は中村とはしているんですけれども。

【鉄矢会長】　　やっぱり人員問題のところにちょっと帰結しちゃうんですけどね、これ

は。

【桑野学芸員】　　結局、そこなんですよね。

【鉄矢会長】　　そこはね。そこはすごく大事な、やっぱり人員と要望と、のところが出てくる。

【桑野学芸員】　　はい。やっぱり子供のことを思えば当然２回、同じ学芸が対応するような、当日の鑑賞教室のときと事前授業で顔を合わせていれば、この間、お話を聞いた人ということでよく話も聞いてくれますし、作品についてもより理解が深まっているのは明らかなので、そこのところはあるんですけれども、やっぱりちょっと現実的なところでは大変だと思います。

【中村学芸員】　　事前授業と鑑賞教室を担当する人間がどうしても別々になってしまったりだとか、学校によって２時間、事前授業の時間がとれるところと、そのかわりに３クラス一斉合同でやるという形になっちゃったりとか、小学校によっては各クラス、１クラスで１時間ずつで３時間というふうになったりだとか、やっぱりそこがうまく、こういう形という決定的なものをつくれないんですね。そのときそのときで何とか対応できる形をひねり出してやっている形になっちゃうので、そこはどうしても根本的に人の問題が解決しないと、ちょっとこれ以上はどうにもならないかなという限界を感じているところでもあります。

【山村委員】　　芸術文化振興計画のほうも全く同じ問題が出て、結局、人がいない、職員もぎりぎりに減らしている。それも学芸員だけじゃなくて行政全体がそうで、そこが褒められて、にもかかわらず、これだけ助成金をとってきました。人はいないけど、これだけのことをやっています、で褒められるという構造自体を変えていかないと。それは発想が逆転しているんじゃないかというふうに常々思っています。

何のために文化事業をやるかというと、人が幸福になるためだし、人が精神的に豊かになるため、それから幸せに暮らしていけるというようなことが第一義。それを目的にやっていることのはずなのに、何で人を犠牲にして無理をさせることによってこれだけサービスできましたというところに行っちゃうのか。どうしても何かそうなりがちで、正規の人を減らして臨時職員をたくさん雇いました、それによってコストを抑えましたということが褒められるような構造自体を変えていかないと、どうも議論がかみ合わないというか。ＮＰＯができました、ＮＰＯにこれだけやらせましたみたいなとか、学生にこれだけやらせましたみたいな感じ、それはちょっとおかしいなと常々思っているんですけれども。

学芸員も含めていろいろな専門家、学校の先生もそうなんですけれども、自分が楽しいからもちろんやっているんだけれども、自分が楽しいだけだとやっぱりもう文化行政はできないので、美術館もできませんし、やっぱりそこはみんなプロの意識になっていますし。なっていない人もいるかもしれないけれども、大体なっていまして、自分の時間は自分の時間、でも、公務は公務で、できるだけお客さんに喜んでもらえるようにということで一生懸命やっていますので、そこはちゃんと対価を払って、安定した雇用のもとに文化行政を担ってもらう。それだけ我々、行政としては小金井市の意識は高いんですよというふうな、文化が決してぜいたくというのではなくて、必要なものなんですよというふうな形で、これはもう行政のほうで肝を据えてやっていって説得していただかないと。何かほんとうに考え方が逆転している気がします、いつも。

【鉄矢会長】　そうですね。じゃなければ、その辺はぜひ改善したいし、改善じゃなくて、少し反転しないといけないところがありますね。

【山村委員】　職員の方はほとんどオーバーワークだと思います。

【鉄矢会長】　皆さん、そうですね。

【山村委員】　職員が、自分が犠牲になればよくなるというものじゃなくて、まさに職員の人のオーバーワークをやめて、働き方改革をしていただいて、余裕を持って仕事をしないとそのうち絶対失敗するというか、どこかで何が起きるか分かりません。

【鉄矢会長】　いかがですか。

【上原委員】　同意見というか、結局、学芸員の方ですか、女性の方でしょう。男性の方はおそらく、こういう正規じゃなくて、やっぱり初めから応募しないというか、自立できないというか、できないから初めから。結局、女性の方が、まあ、しようがないというか、で、働いていらっしゃると。一生懸命やっていらっしゃると思うんだけれども、やっぱりそれは、５年でしたか。

【中村学芸員】　５年。

【上原委員】　５年しかおられないとか、身分はあまり保障されないし、それこそ一生懸命やってもお給料も少ない。やっぱり今、ジェンダーの問題、すごく言われているけれども、小金井市も率先して、今、急に学芸員の方を正職員というのは難しいかもしれないけれども、やっぱりそういう方向で持っていってもらいたいと思います。

【鉄矢会長】　いかがですか。

【川﨑委員】　私は、広報の点なんですけれども、今回、都報で爆発的な効果が見られ

たと思うので、対応はすごく大変だと思うんですけれども、今年、ホームページができるということなので、そういった方面でまた入館者数が増大して、いろいろな人に知っていただく機会ができたらいいなと思います。

あと、企画展と所蔵作品展についてなんですけれども、過去４年間、絵画の展示がずっと続いていたと思うんですね。それ以前の展示で、田中絹代さんの着物の展示ですとか、私物の展示の企画展ですとか、タマのカーニヴァルとかで楽器の演奏が中でされていて、立体的なものの作品が展示されていたりと、そういう絵画以外の芸術作品の展示もここで見られるんだと、そういう何かバリューがここにはあったなと思うんですね。身近に芸術を体感できる素敵な場所だなというので、ファンになったので、絵画ももちろんずっとすばらしい展示が続いているとは思うんですけれども、それだけによらず、幅広く芸術を地域で体験できる場所に今後なっていったらいいなと思います。

【上原委員】　その展示なんですけれども、作品、４年間見せていただいて、ここの、やっぱり言われたように私も同じような感じを持っています。地域には安野光雅さんもいらっしゃるし、地元の有名な方もいらっしゃれば、この地域でほんとうに熱心に絵を描いたり、工芸とか、いろいろやっていらっしゃる方もいるから、そういう方の発表会といったら変ですけれども、展示できる場所があればいいなとか、武蔵野美術館にはよく行くんですけれども、やっぱり絵本の原画展、結構やっているんです。おもしろいし、子供さんたちも多いし、楽しいし、すごくハードルが低いというか、親しみやすい。そういうのも取り入れてほしいなというのは常々思っています。

【鉄矢会長】　ありがとうございます。

そうですね。芸術が身近になれる美術館みたいなところは非常に大事だと思うんですけれども、それとあと、もう一方で、一番最初のこの美術館の方針である、貸しギャラリーにならないというところもすごく難しいところなので、いい作品をどういうふうに宣伝していくか。名が売れたから入れるんじゃなくて、名が売れなくても自分の目でいいというものが、多分、学芸員さんがそういうふうになるのかどうかですけれども、一番難しい専門の部分だと思いますね。でも、期待していますと。

私はやはり、あとは、建物の長期修繕計画が一番気になっています。一応全体の市の持っている建物の長期修繕計画はこうなっているよというのは聞くんですけれども、それが美術館の場合はどういうふうにやっていくのかというのを少し細やかにやっておかないと、多分、空調関係も、役所が思っているレベルの金額というよりも、急に壊れちゃったら大

変だぞという話になったりするような気がするので、その辺の計画を、全体のふわーっと、長期計画の中をもう少し細やかにやっておいたほうが怖くないかなと思います。

【鈴木委員(館長)】　その点で１点。役所全体の公共施設の総合管理計画というのを今、小金井市で持っているんですけれども、その計画の中では個別の施設についてまだまだ細かな計画まではつくっていないんです。来年度、令和２年度、３年度の２カ年をかけてそれぞれの、ここでいえば美術館の個別の計画をつくっていくという流れになっています。

来年、業者も入って、施設の状況とかの調査が多分入ると思うので、何年度にどういうことをやっていくとかという形になるのかどうか、自分も細かいことまではちょっとまだよく見えていないんですけれども、計画をつくっていくという中で、施設をどうしていくかというのはそこで議論されて計画化されていくと思います。計画に位置づけられると、やっぱり予算要求、計画があるからきちんと計画どおりやろうよということで予算要求もしやすくなりますので、うまくいけばいいなというふうに思っております。

【鉄矢会長】　先ほどの入り口がいっぱいで大変だったというように、こういう対応もこれから社会的ニーズになってくるのかもしれない。あのキャッシュレスってどこまでいくのかというのも、まだ見たことがないんですけれども、多分、そういうふうに持たない海外の人というのもいるんだと思うんですよ、現金を持たずに海外の人が動き始めるというのも出てくるので、オリンピックのころになると。多分、そういう人たちにも、ああ、いいところだねと、インバウンドで来てもらうためには何かそういう対応はできたほうがいいんじゃないかなと思っています。

【桑野学芸員】　ホームページ、限られたページ数の中で１ページだけ英語のページができます。

【鉄矢会長】　そうですか。

【山村委員】　すばらしい。

【鉄矢会長】　あと、ここにも書いているんですけれども、庭木の手入れですね。忘れちゃいけない、庭木の手入れは、豪雨も来るし、風雨もすごい嵐の中で、建物にどんと落ちたら大変なので。

【事務局】　本当に言ってほしいです、大きい声で。全部１本ずつ、職人さんが登って切っていかないと、クレーンが入らないので、なので１本ずつの単価がものすごく高いんですね。今、そこに、去年度調査をしましたら、２５メートル、３０メートル近くある木が２０本近くあるので、まず、東側の、こっちに倒れちゃうのも困るんですけれども、人

様のお宅のほうに倒れて事故が起きたりとか、物損、あと、人命に影響があるのは一番怖いので、その辺のあたりを今回の提言で集中的に言っていただけるとありがたいなと。

【鉄矢会長】　　そうですね。特に近年、ほんとうに気候変動の影響なのか、豪雨のこともあるので、水は大丈夫なんですか、豪雨が降ったとき……。

【薩摩学芸顧問】　　いや、ここはちょっと、ハザードマップでいうとあまりいいところじゃないんじゃないですか。

【鈴木委員（館長）】　　この上に危険区域みたいのが、はけの崖線の上のほうにあるんですね。いろいろな建物の建築制限があったりとか、そういうエリアもあります。ただ、東京都のほうが全部調査をして、例えばこの東側の擁壁の安全性とか、確認はされているようです。

ここ、湧水は湧いていますが、大雨で、これが川のようになって増水してなんていうことには多分ならないだろうなと思っているんですけれども、さっきの植物の話と関係してくるんですけれども、ずっと管理していないと、崖がどんどん削れていったりとか崩れたりというのも想定されるので、緑地については何とか手入れをしていきたいなというふうに思っています。

【鉄矢会長】　　竹が増えるだけでも森がだめになっていくので。

【事務局】　　竹は毎年、タケノコ退治をしております。

【鉄矢会長】　　あと、上のほうが全部コンクリートで埋められると、水が入ってくる場所が、普通は雨水で横のところを通っているんですけれども、それがあふれちゃうと、ここに来ちゃうんです、下にね、ということも考えたり、想定外を、想定を少し大きくしておく必要があります。

【事務局】　　ほんとうにそうです。

【鉄矢会長】　　と思っています。すみません、この５番に博物館登録についてがちょっとあるんですけれども、博物館登録については、するべき方向で……。

【事務局】　　議論をしていただく、ですかね。相当施設に……。薩摩先生、どうなんですかね。

【鉄矢会長】　　すみません、薩摩先生か山村先生に、登録するとどういうメリットがあるかというのは、ちょっとお二人の……。

【薩摩学芸顧問】　　博物館法でいうと登録博物館と博物館相当施設というのがあるわけですけれども、登録博物館になると、例えば重要文化財級の展示とか、これもまたさらに

その上に重要文化財の公開承認施設とか何とかって、またもう一つの上の資格がありますけれども、いろいろな一応文化庁のお墨つきを、美術館としてハード面、ソフト面整っているというお墨つきをもらうことになるので、対外交渉的には大変便利にはなります。

ただ、必ずしも大きな、また山村さんにも伺いたいのですが、東京都博物館はどうなっていますか。

【山村委員】　博物館相当施設。

【薩摩学芸顧問】　そうなんですね。必ずしも大きなメリットがあるわけじゃないので、例えば、私の古巣の東京都現代美術館なんかも登録博物館にはしていないです。あれほどの規模でありながら、相当施設で十分だということです。

ですから、何かどっちかというと実質的な得よりも、ちょっと名誉的なところというのはなきにしもあらず。ただ、博物館系で古いものも扱うようなところは、むしろ目指すような傾向はありますね。ただ、今のこの施設では多分、登録博物館にはしてもらえないと思います。

【山村委員】　年間の開館日数も必要となります。

【鉄矢会長】　そういう制限がある。

【山村委員】　学芸員等々もそうですし、いろいろな制限があります。

【薩摩学芸顧問】　施設の問題、開館日数の問題、博物館法では１年に１５０日ですか。

【山村委員】　１５０日。

【薩摩学芸顧問】　１５０日開館すればいいので、その辺はクリアしているとは思うんですけれども、学芸員が２人とも非常勤だとか、いろいろなことをやっていくと多分それは無理だと思います、設備の問題そのほかでいっても。

実はこれはオフレコというか、この中村研一の奥様が、この美術館をつくろうというときに東京都教育委員会の文化課に相談に来られたんですね。たまたまそのときに、第二庁舎の２７階の文化課を出勤の場としている東京都の学芸員は２人しかいなくて、そのうちの一人が私で、それで実はいろいろ相談に応じたんです。だから、今、私がここにいるのも因縁かなと思っているんですけれども。かなりいろいろなことを言って、防火の問題とか、防災の問題とか、それから組織上の問題とか、バックヤードの問題とか、それなりにうまくいっているところはあるかなとは思っていますけれども、むしろ老朽化の問題でしょうね。老朽化の問題と非常勤しかいないとかという問題を考えると、ちょっと登録は多分無理だと思いますが、別に登録にしなくても、こういう活動ならばやっていけると思い

ますので、なるべく目指したほうがいいとは思いますが、あまり無理しなくてもという気もしていますけれども、山村さん、いかがでしょうか。

【山村委員】　　難しいことですね。博物館法自体が今、いろいろと議論になっていまして、いろいろ見直したほうがいいんじゃないかという議論もあったりとか、一気にできなかったりとか、博物館法と芸術文化振興法といろいろな法律同士の関係とかも何かちょっと複雑なところもあるみたいで、過渡期だとは思うので、必ずしも今、薩摩顧問が言われたとおり、これを目指すということを第一義に考えることはないとは思いますが、その昔、博物館とはこうあるべきだみたいなところでできた、学芸員の常駐だとか、年間開館日数だとか、規模だとか、バックヤードなど、目指すべき手本にはなりますので、目指していくこと自体は全然悪いことじゃないと思いますので、その中で無理をしないように頑張ればいいんじゃないかなというふうに思います。

【薩摩学芸顧問】　　極めて具体的にいえば、博物館相当施設になるほうを目指せばいいと思いますけれども。

【鉄矢会長】　　まずは博物館相当施設を目指して勉強をしましょうというぐらいの。

【薩摩学芸顧問】　　まあ、それもありますけれども、それをまた目指すためにはいろいろとハード、ソフトを改革しなきゃならないところも出てきますので、そういうちょっと目標があるとやはり仕事も進むかもしれませんね。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

質問的にいうと、すみません、ギャラリーコンサートというのは広報に入るんでしょうか。

【事務局】　　事業です。

【鉄矢会長】　　事業ですか。それとも、音楽というものを、この美術館の中に芸術の一つとして新しくコラボレーションしたとかいう表現にするのか。

【事務局】　　そうですね。広報というわけではありません。

【山村委員】　　普通、教育普及事業とか、そういうところに入れるのが多いです。

【鉄矢会長】　　教育普及事業。

【山村委員】　　ちょっと運営と広報について、３番で一緒になっていて、ここに入ることがすごく多いものですから、分けたほうがいいかなと。

【事務局】　　運営と広報を分ける。はい。

【鉄矢会長】　　あと、「こごうちぶんこ」の読み聞かせはどういうふうに位置づけるのか。

【山村委員】　　読み聞かせも地域連携に入る。

【薩摩学芸顧問】　　地域連携でしょうね、これは。

【鉄矢会長】　　地域連携。

そのほか、ございますでしょうか。

少し８時を過ぎていますので、運営協議会の提言については、この辺で一度閉めてよろしいでしょうか。

（「はい」の声あり）

【鉄矢会長】　　では、次に、次第第４の意見交換ですが、かなり今の中で意見交換をいろいろしちゃったんですけれども、まだほかに何か質問、ご意見がありましたらお願いします。

では、最後の５、その他について、何かご意見等ございましたらよろしくお願いします。

【事務局】　　この提言を取りまとめるのに当たっては、どういうまとめ方をしたらいいかということのご指示をいただきたいなと思うんですけれども。

【山村委員】　　どうしましょう。

【薩摩学芸顧問】　　これはプリントレベルだけですか、メールでも送れますか。

【事務局】　　送れます。

【鉄矢会長】　　意見を入れていただいて、文章になっていなくてもいいんですけれども、ならして、こういうものが入っていたというのが入ったものをいただけるとありがたいです。

【事務局】　　わかりました。それでは、今日のご意見を、このフォーマットで反映したものをお渡し、メールでデータ送信という形でよろしいでしょうか。

【鉄矢会長】　　はい。よろしくお願いします。

【鉄矢会長】　　では、次に、事務局から議事録の校正についての説明をお願いします。

【事務局】　　今回お配りしました令和元年度第３回小金井市立はけの森美術館運営協議会の議事録についてですが、１カ月後の２月２５日までに、校正があれば事務局までご連絡をお願いします。

以上です。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

続いて、次回の運営協議会の日程について、第３回運営協議会で決定した日時を事務局より確認をお願いします。

【事務局】　　第３回のときに、今回はこの提言のことがあるので１回多くということで第５回が２月２８日、金曜日の１８時３０分から、今、ここのはけの森美術館多目的講義室で行いまして、これが今年度最後になりますけれども、よろしいでしょうか。

【鉄矢会長】　　よろしいでしょうか。

（「はい」の声あり）

【事務局】　　よろしいでしょうか。では、よろしくお願いいたします。

【鉄矢会長】　　皆さん、大丈夫ですね、スケジュール。

【薩摩学芸顧問】　　１８時３０分。

【事務局】　　１８時３０分です。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。　では、２月２８日１８時３０分、最後の運営協議会、お集まりください。

ほかになければ、以上ではけの森美術館運営協議会を終了します。お疲れさまでした。

――　了　――